

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 田中 均

本論文は、ドイツ初期ロマン主義を代表するフリードリヒ・シュレーゲルが1795年から1805年にかけて遺した著作・遺稿群を検討しつつ、古典文献学者として出発した最初期の美学から、『アテネウム』の諸論考に代表される「イエーナ・ロマン主義」時代の美学を経て、「イエーナ・ロマン主義」解体後のカトリックへの傾倒の時期にいたるまでの彼の理論の変遷を、「芸術と共同体」という視点から通時的かつ体系的に読み解く試みである。ここで著者田中均氏が「芸術と共同体」に着目するのは、従来のたとえばヘーゲルやカール・シュミットに代表される初期ロマン主義に対する先入見——すなわち、初期ロマン主義は倫理性・社会性に対する意識を欠いている、という先入見——を覆し、初期ロマン主義の美学に独自の「共同体」理論を読み取ろうとするためである。

第1章では、最初期の美学上の論考『ギリシア文学研究論』（1795年）を検討し、シュレーゲルが古代ギリシアの「公論」をモデルとしつつ新たな趣味の共同体を作り出そうとしていたことを確認した上で、第2章、第3章では、初期ロマン主義時代を代表する論考である『共和制試論』および『アテネウム断章』へと視点を移し、シュレーゲルが公論を前提とする趣味の共同体から芸術家個人の精神を重視する立場に移行したことを明らかにする。第4章は、初期ロマン主義の時代におけるシュレーゲルが「個人」ないし「個体」を唯一無限の「実体」の「断片」ないし「像」とみなすことによって、個と全体とを根源的に調和するものと捉えていることを示し、第5章では、シュレーゲルの未完の小説『ルツィンデ』の解釈をとおして、個から全体への移行が恋愛と友情という芸術家同士の個性の相互補完によって可能となることが論じられる。これが著者のいう初期ロマン主義に独自の「共同体」理論の内実である。だが、この共同体も実際には特権的な天才相互の関係にとどまるために、こうした芸術を理解しえない社会との間に葛藤を抱える。第6章では、こうした葛藤が初期ロマン主義の解体を招き、さらにはシュレーゲルのカトリックへの傾斜を促したことが跡づけられる。

著者によるシュレーゲルの著作・遺稿群の解釈は、自らの解釈に対する反論をもあらかじめ配慮しつつそれへの再反論を含むものであって、着実にして丁寧であり、従来の初期ロマン主義に対する先入見を覆そうとするその議論は説得力を持っている。初期ロマン主義に先立つ理論家（たとえばカントやシラー）が「芸術と共同体」の関係についてどのように捉えていたのか、その点に踏み込んでいないために、初期ロマン主義のおかれていた時代状況がなお十分に論じられていないことが惜しまれるが、このことは本論文の価値を損なうものではない。

以上の所見に基づき、本審査委員会は本論文が博士（文学）に値すると結論する。